

東京YWCA

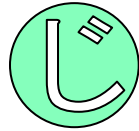
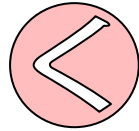
新地っ子の夏休み2014 報告書

～東日本大震災から4年目、子どもたちとすごした記録～

福島県相馬郡新地町の子どもたちが、
少しでも毎日を過ごす元気を得られるように、
一緒にキャンプをしてきました！

主催：公益財団法人東京 YWCA

協賛：三菱商事株式会社



はじめに～責任者より	1
キャンプ実施概要	3
事業の経過 準備～実施～ふり返りの会まで	4
キャンプ日誌	5
アンケート結果	7
スタッフの報告（青年リーダー）	13
スタッフの報告（チーフリーダー）	25
カメラマンより～感動ということ～	26
新地町の子どもたち 4年目の関わりを経て～「集団」と「個」～	27
スタッフ紹介	29
ご協力くださった方々、協力企業／団体のご紹介	30
資料	31



～はじめに～ 責任者より

外山真理／キャンプネーム まりさん
 (東京 YWCA 青少年育成事業部 統括責任者)

4回目となった「新地っ子の夏休み」。このキャンプは、「被災地の子ども達を支えるためのキャンプ」という目的を越えて、主人公である子ども達の魅力に引き込まれる世界でもある。新地の子ども達は、打てば響く心と体が育っており、実に生き生きとしている。今回もこれまで同様、いやこれまで以上にそれを感じることが出来た。

定点観測のように続けている「新地っ子の夏休み」で会う子ども達の様子は、年ごとに変化している。荒々しくエネルギーを発散した1年目、身近に死を感じている様子や震災の記憶が蘇っている様子が見られた2年目、落ち着いてきている様子が見えた3年目。そして、今年はさらに落ち着いた子ども達になっていた。震災で家族や親族を失っている子どもたちもいれば、いまだ仮設住宅で暮らす子どもたちもいる。震災が原因ではないが、片親の子どもたちもいる。それはそれは様々な事情を子どもたちは背負いながら、時には我慢しながら日々の暮らしを重ねていることもあるだろう。また、激しく環境が変わった 3.11 以降、大人以上に感じやすく受け止めてもいることと思う。



子どもたちが心の中に溜め込んだ感情を出したい時には出せるよう、受け止め手である青年リーダーが常に共にいた。青年の背中に気持ちよさ気に子どもがおぶられていたり、青年に安心して体を寄り添わせる子どもの姿があり、話に耳を傾ける青年たち。ひとりひとりを心から受けとめる、そのことに徹したキャンプであった。そして、たくさん遊び、大家族ようになった私たちだった。受けとめられる環境の中で心が解放された子どもは、よく笑い、よく集中し、相手を思いやれるようになっていく。子どもたちの豊かな感受性と表情が今なお忘れがたく思い出される。



一方、常に心配なのは財源確保である。助成金は震災2年日以降現地化してきており、東京の団体の申請は難しくなっている現状がある。幸い4月にはご寄付により必要経費の約半分を確保でき、見切り発車した。それは、ほとんど初めて会うヴォランティアとスタッフ同士が、研修を受け、願いを共有し、準備を重ねながらチームワークを作っていくにはそれなりの時間が必要だからである。明治大学をはじめ5大学の学生、社会人は、「子どもに関わるということ」を学ぶところからキャンプ創りを始め、リーダー会でチームビルディングを意識的にしてきたことで、よいチームワークをキャンプ前に築くことが出来た。このキャンプに続けて参加する青年達が数人いたことも全体を支える力となり、また、YWCAのキャンプスキルを身につけ、臨機応変にプログラムを創る能力に長けた若い2人のリーダーシップも素晴らしかった。実は財源確保は十分ではなく、いまなお寄付活動を続けている。キャンプを実施するために必要な「思い」「人」「スキル」はあるが、唯一乏しいのは財源。今後の課題である。



子どもたちは、心に刻み込まれた衝撃的な記憶に人生を通して付き合い行かなければならないだろう。しかし、キャンプ体験の中で、子どもたちは弾ける自分、共同生活の中で工夫や苦心しながらやっていける自分と出会ったことと思う。その体験が、子ども達の「生き延びる力」を育てていくことだろう。そして、相互に遠く離れた小学校だけれど、町の中に友達のつながりが生まれているのではないだろうか。



最後に、今年も、多くの方々、諸団体にご協力、ご支援を頂き、「新地っ子の夏休み2014」を実施できましたことに、心から感謝申し上げます。



* 今回、「キリスト教森郷キャンプ場」を使わせて頂けたことも幸運だった。東日本大震災時、同キャンプ場のメイン施設の一部が損壊した。震災後は国内外からのヴォランティアの宿泊先となり、キャンプ場として再開したのはまさに今夏だった。しかし、この秋にはメイン施設が取り壊される。「新地っ子の夏休み」で使えるのは今年が最初、そして最後となった。

キャンプ実施概要

【目的】

東日本大震災で被災し、また、原子力発電所事故による放射能汚染の危険と不安の中で福島県の子どもたちは物理的にも心理的にも我慢を強いられる生活を送っている。その子ども達が、夏休みの数日間、安心して過ごすことのできる環境でのびのびと楽しい共同生活を過ごすことにより、心と身体を癒し、希望をもって生きる力を取り戻すことへの一助とする。また、2011年より継続して福島県相馬郡新地町にある3小学校の子ども達を対象としているが、今夏は中学生もジュニアリーダーとして受け入れ、広い年齢幅の子ども達がキャンプ生活によって「新地町の子ども」として相互につながり、新しいコミュニティを作る次世代育成につながることを期待する。



【実施期間】

2014年8月7日(木)～8月10日(日)

【実施場所】

「キリスト教森郷キャンプ場」(宮城県宮城郡利府町)



【参加者】

福島県相馬郡新地町の小学3～6年生:30名 中学生:5名
青年リーダー・スタッフ:21名



【主催】

公益財団法人東京YWCA 青少年育成事業部

【後援】

福島県新地町教育委員会

【協力】

新地町町立駒ヶ嶺小学校、新地小学校、福田小学校
NPO 法人日本子どもソーシャルワーク協会
明治大学震災復興支援センター



【協賛】

三菱商事株式会社

●新地っ子の夏休み2014 スケジュール●

	8/7(木)	8/8(金)	8/9(土)	8/10(日)
午前		わくわくタイム	ハイキング	片づけ キャンプ場出発
午後	キャンプ場到着 キャンプ場巡り	わくわくタイム	わくわくタイム	
夜	親睦会	グループタイム	キャンドルナイト	

☆「わくわくタイム」は、選択プログラムです。

事業の経過 準備～実施～振り返りの会まで

4月

	■キャンプ概要とキャンプ場決定
--	-----------------

5月

5/22(木) ～5/23(金)	■スタッフキャンプ場下見、新地町視察、放射線量測定 新地町教育委員会、新地町内小学校訪問
5/30(金) 18:30～21:00	■リーダー研修 オリエンテーション、アイスブレーキング(吉田夏子) 研修①「4年間の新地っ子キャンプに参加して ～「集団」と「個」について考える～」(講師:寺出壽美子)



6月

6/14(土) 13:30～16:00	■研修②フォーラム出席 第2回被災地とところをつなぐ 「東日本大震災の風化を防ぐフォーラム」 ～福島県沿岸の町「新地町」の取り組みと首都圏の私たちができること～ 主催:東日本大震災の風化を防ぐプログラム実行委員会 共催:公益財団法人東京YWCA/明治大学震災復興支援センター
6/23(月) 18:30～21:00	■リーダー会① ・ 2014年度の新地っ子の夏休みについて ・ キャンプ場紹介 ・ キャンプの生活と持ち物/リスクマネージメント
6月中旬 ～下旬	▽参加者募集開始 ・ 新地町教育委員会および各小学校の協力により、 新地町の小学生へチラシを配布 ・ 過去の参加者(現中学生)へチラシを送付



7月

7/18(金) 18:00～19:00	▽キャンプ参加者対象説明会(場所:新地町)
7/23(水) 18:30～21:00	■リーダー会② ・ 担当グループ発表 ・ グループのメンバー情報確認 ・ キャンプのスケジュール確認 ・ 「わくわくタイム(選択プログラム)」内容検討
7/29(火) 13:00～16:00	■リーダー事前準備 備品準備/名札作成/スケジュール表作成



8月

8/6(水)	■現地にて事前準備 キャンプ場確認/打ち合わせ
8/7(木) ～8/10(日)	▽「新地っ子の夏休み 2014」実施
8/25(月)	▽参加者とその保護者へアンケートを送付



9月以降

9/30(火) 18:00～21:00	■リーダー会(ふり返りの会) ・ キャンプの記録写真選択作業 ・ ふり返り「次につなげるノート」づくり
9月～11月	■報告書を作成



キャンプ日誌

8月7日(木) 1日目

記録：山川貴澄/たか

初日、リーダーたちは新地町農村環境改善センターまで子どもたちを迎えに行き、出発式を行った。バスの中では子どもたちは緊張して表情を見せている子もいた。お昼に子どもたちが到着し、キャンプ場で準備をしていたリーダーたちは大きな声で明るく挨拶し子どもたちも元気に返答してくれた。野外礼拝堂でグループごとに昼食をとった後、荷物を部屋に置き、サイトめぐりをした。子どもたちは豊かな自然に囲まれたキャンプ場の環境に大喜びで飛び出していった。その後グループごとにお風呂に入ってから、礼拝堂にて夕食をとった。初日の夕食はかつ丼だった。おかわりをする子どもも多かった。全グループの夕食が終えたところで、そのまま親睦会へと移行した。親睦会では自己紹介ゲームやシippo取り、フルーツバスケットや玉入れ、伝言ゲームなどを行い、子どもたちはとても興奮していた。20時過ぎに親睦会は閉会し、各グループ部屋で過ごした。

夜のリーダー会

初日にリーダー会では、各グループの子どもたちの様子などの情報共有と、明日のプログラムの最終調整などを行った。初めて「新地っ子の夏休み」に参加する子どもも多いためか、他の子どもたちやリーダーとの会話が少ない子どもがいたとの報告があった。リーダーたちは真剣な表情で、明日以降どのような対応をしたらよいか、などの議論を交わした。また、自由時間が1日の大半を占めるため、子どもたちは好きなことを好きな場所でできる。リーダーらは、うまく連携して子どもたちに付き添うことが重要だと確認し合っていた。翌日のプログラムについては、晴れが予想されていた午前中に外遊びの企画を立てる等調整を行った。

8月8日(金) 2日目

記録：中野亜矢子/やこ

2日目は朝から曇っており夕方からは雨が降った。1日通して気温は涼しく、過ごしやすかった。キャンプ場で迎える初めての朝ということもあり、朝食準備は慣れない部分もあったが、担当グループは協力しながら配膳を行っていた。朝食は焼き立ての手作りパンとポテトサラダ。焼き立てパンは美味しいと評判で、追加で持ってきていただいたパンも早々とはけていった。

午前は、水鉄砲・クラフト・フィールドビンゴ・室内遊びなどが主だった。特に室内遊びは、事前にリーダーが行っていた簡単な室内装飾に感化されたのか、自分なりに部屋をデコレーションするのが女の子たちの間で流行っていた。外遊びから戻ってきて子どもたちが、シャロームハウス1階で行っていたストーンペイントなどのクラフトに興味を示す、という姿がよく見られた。昼食は冷やし中華、こちらも大人気でお替りする子が続出した。

午後は、水鉄砲やクラフトを引き続きおこなったほか、前日から子どもたちから希望があがっていた釣りもおこなわれた。笹の茎、紐などで釣竿を自作し、キャンプ場の外れにある水辺に向かった。中には木の枝と石をくりつけた銚子を作る子もあり、自然の中にある素材を活かした創意工夫が見られた。釣竿では釣れなかったものの、ある子は岸近くの浅瀬にいた小さな魚を手ですくって捕まえ、瓶に入れて部屋に置いていた。メダカほどの小さな魚だったが、子どもたちの間では「ハゼ」として人気を得ていた。

風呂は時間と順番を決めて入ったが、どのグループも遅れなく行動できていた。風呂の間も楽しげな会話は途切れず、今日あったことや楽しかったことを話していた。夕食はとんかつ、各テーブルに置かれたソースをお互いに声を掛けて仲良く回していた。夕食後はナイトハイクの予定だったが、悪天候のため星が見えず、フリータイムに変更となった。自分たちの部屋を使って、お化け屋敷をつくるグループが続出した。仕掛けと脅かし方が行き過ぎ、一部危険なところもあった。脅かされる



のを嫌って部屋にこもってしまう子やお化け屋敷の中で転んで頭を打ってしまった子もいた。その件に関して、リーダーと子どもたちと一緒に考える時間をもった。消灯時間後は、騒がしくなるかと思いきや、11時頃にはどの部屋もすっきり寝静まっていた。

8月9日(土) 3日目 記録：平澤健太郎／ドンキー

この日は雨の予報だけあって、朝から曇り空となっていた。ちょっと眠そうな子が見られる中朝食を食べた。この日は午前中にハイキングを行った。ハイキングに出かける人(8割)と、シャロームハウスで時間を過ごす人(2割)に分かれた。ハイキングでは、コースの初めは急斜面になっていて、休憩を挟みながらゆっくり進んだ。木々に囲まれて自然を感じることができたのではないだろうか。折り返し地点に着くと、グループごとにお菓子を食べて疲れた身体を癒した。後半は、グループごとに進んでいき走って降りるグループもいて楽しめたようだ。

シャロームハウス組は、トランプをしたり工作をしたりなど、まったりと過ごし、ハイキング組の帰りを待った。昼食を食べた後、「わくわくタイム」では、4つの催しがあった。水辺では魚などを捕まえたり、石を使って水切りをしたりなど子どもから大人まで楽しんだ。礼拝堂では、パラバルーンで遊んだ後、しっぽとりをするなど、体を動かす遊びで盛り上がった。広場では、水鉄砲や、リーダーに水をかけたり水風船をぶつかけたりして遊んだ。しかし、終盤に雨が降ってきたため広場での遊びは引き上げられた。シャロームハウスではキャンドル作りが行われ、各々素敵な作品が出来上がった。

その後、夕食を食べ終えると、キャンプ場の職員に向けて子どもたち全員で作った感謝のメッセージを贈った。シェフからはゴスペルソングのサプライズがあり、歌唱力の高さに度肝を抜かれた。そのあとでは、雨で中止となったキャンプファイヤーに代わり、礼拝堂でプログラムが展開された。その時、廊下を暗くし、日中作ったキャンドルを並べて幻想的空間を表した。プログラムは4つほど全員でできる遊びを展開したほか、中学生から感想や、青年リーダーからの歌のプレゼントでキャンプの最後の夜に幕を閉じた。

夜のリーダー会

リーダーからの報告では、子ども同士に変化が見られ、年長者が他の子を引っ張るなどの様子が覗えた。その他にも、子どもから楽しく遊ぶことができ満足だったという声が上がった。明日の帰宅の準備に向けて荷物整理を行う事や、明日の朝の片づけの段取りなどの確認を行いリーダー会は終わった。リーダー達が各部屋に戻ると全員就寝していた。

8月10日(金) 4日目 記録：坂本祐介／もっつ

キャンプ最終日、この日は一日中雨が降っていた。朝早くから起きている子が多く、子ども達は室内で自分の作った工作をまとめていたり荷造りを始めている子もいた。8時にキャンプ最後の朝食を済ませ、部屋の掃除や荷物の整理を終わらせる。このときまだ遊び足りていない様子の子が多く、みんな元気いっぱい動き回っていた。雨のためシャロームハウスで全員で記念撮影を行い、10時30分にキャンプ場を出発した。バス内では各リーダーとキャンプの振り返りや連想ゲームなどをして遊ぶ子どもが多かった。又、配られたおやつは仲良く分け合って食べていたようだ。12時に新地町農村環境改善センターに到着し、閉会式を行った。開会式では保護者の方にキャンプで行った事を簡潔に報告し、解散した。迎えに来る保護者は早めに来ていて、各リーダーは保護者と挨拶を交わしながら子ども達を引き渡す。また来たいという子ども達の声が多く、とても良いキャンプとなった。



参加者アンケートから見るキャンプ

～新地っ子の夏休みはどうでしたか？～

【参加者概要】～こんな子どもたちが参加しました！～

性別	人数
男子	12
女子	23
計	35

学年	人数
3年生	8
4年生	10
5年生	11
6年生	1
中学1年	3
中学2年	2
計	35

学校名	人数
新地小	6
福田小	9
駒ヶ嶺小	15
尚英中	5
計	35



【アンケートの回答内容】

アンケート回答者：参加者 35 名に送付、22 名分回収(回収率 63%)。

Q1.今年のキャンプの日数

(3泊4日)についてはどう思いますか？

キャンプの日数	人数
適切	17
短すぎる	5
長すぎる	0
計	22



Q2.開催時期については

どう思いますか？

開催時期	人数
8月上旬	13
8月中旬	2
8月下旬	2
夏休み中ならいつでも	5
計	22



Q3.キャンプ中の食事は

全体としていかがでしたか？

食事	人数
おいしかった	19
普通	3
おいしくなかった	0
計	22



Q4.キャンプリーダー(お兄さんや

お姉さん)の対応はどうでしたか？

リーダーの対応	人数
とても良かった	16
良かった	5
普通	0
あまり良くなかった	1
計	22



Q5. 今回のキャンプにお子様を参加させようと思った理由は、次のどれですか？当てはまるものすべてに○をつけて下さい。

参加理由(複数回答)	人数
のびのびさせてあげたかった	8
自然(森や川)の中で過ごさせてあげたかった	11
気分転換させたかった	12
他の小学校の子どもと親しくなって欲しかった	11
たくましくなって欲しかった	6
集団生活の中で協調性を身につけて欲しかった	14
ストレスを発散させてあげたかった	8
規則正しい生活を送らせたかった	4
その他	1

父親の仕事の都合で、夏休み中にお出かけができなかったのです。



Q6. 次の中で楽しかったものはどれですか？当てはまるものすべてに○をつけて下さい。

楽しかったこと(複数回答)	人数
バスの中	9
キャンプ場内の散歩	8
1日目夜の親睦会(逃げる玉入れ、しっぽとり、伝言ゲームなど)	18
広場でのわくわくタイム(水鉄砲、大縄、フライングディスクなど)	16
シャロームハウスロビーでのわくわくタイム (ストーンペインティング、キャンドルづくり、クラフトなど)	13
お散歩 (水辺の生き物探し、釣り、イースター・アローとのお散歩など)	12
ハイキング	5
部屋のなかでのおしゃべり・飾り付け・お化け屋敷づくり	16
最後の夜のお楽しみ会(アブラハムなど)	15
お風呂の時間	11
その他	0



Q10. もし来年の夏、小学生や中学生を対象とした今回のようなキャンプがあったらまたお子様を参加させようと思いますか？

来年度の参加	人数
ぜひ参加させたい	19
できれば参加させたい	1
その時になってみないとわからない	1
参加させたくない	0
未記入	1
計	22



Q11. キャンプ後の様子はいかがですか？

キャンプ後の様子	人数
特に心配なことはない	19
少し心配なことがある	2 ☆
未記入	1
計	22
☆1名記述 精神的に落ち着いたのか、眼科に行ったら、視力が少し良くなった。	



Q4. キャンプリーダーに伝えたいこと ～◆自由記述回答◆～

- ーだるちゃんへ: わたしが一番楽しかったことは、水でっぽう大会をしたことだよ。
- みやおへ: わたしが一番楽しかったことは、トランプをしたことだよ。
- ーさっちゃんへ: たのしくすごせてよかったです。ハイキングしたときがたのしかったです。
- ーずっとサッカーをし続けていた様で、リーダーがつき合ってくれていた、と聞きました。体力がありあまっている子なので、とても疲れたと思います。嫌がらずつき合って頂き、ありがとうございました。とても満足しておりました。
- ー喘息もちというので、花火の時など気づかってもらい、ありがとうございました。元気に帰ってこられて感謝しています。
- ーお世話様になりました。大変楽しくすごしてきたようで、気持ちが数日高ぶっていました。楽しい思い出をありがとうございます。
- ーキック、頑張れ～、りゅうりゅう、また会いましょう。
- ーりゅうりゅう、また会いましょう。そして、楽しかったです。
- ー優しくお世話していただき、ありがとうございました。
- ー3泊4日、とてもお世話になりました。なっちゃん・・・来年もまた会えますように。はるはる・・・社会人になるために勉強頑張ってください。との事でした。
- ーあそんでくれてありがとう。いつかまたいく。
- ー自由人なので、集団生活・・・お世話するの大変だったと思います。本当にありがとうございました。
- ーこの度のキャンプでは大変お世話になりました。初めて家族から離れる不安から「行きたくない！」と言っていたのですが、キャンプは予想以上にとても楽しかったようで、お迎えに行ったら開口一番「来年も参加したい！」と言われました。リーダーの方々から頂いたメッセージはとても大切にしており、毎日のように目を通しております。勉強とスポ少の励みになっているようです。本当にありがとうございました。
- ー夏休みの良い思い出になりました。ありがとうございました。沢山の子ども達を相手に大変だったと思います。子どもも楽しんで参加出来たようで、帰宅後いろいろお話してくれました。来年も参加したいと話してい



ました。3泊4日、大変ごくろうさまでした。

—最後の夜のお楽しみ会が、いちばん楽しかったです。また、来年も来るので、よろしく願います。

Q7.今回お子様をキャンプに参加させてよかったことは何ですか？

～◆自由記述回答◆～

- いつもの仲良しの友だちとグループが別々になったけど、他の学校の子と楽しくすごせたいみたいなので、良かったです。
- 親から離れて、自分の事は自分でやる自立心が少しわかった事。
- 他の学校にお友達ができた。
- 他の学校の子とも達と仲良くなったと話してくれた事。
- 家には体験できなかった事を出来たこと。
- 家にいると、あれはダメ、これはダメ、と制限する事が多く、ストレスを感じていたと思います。キャンプでは、とことんやりたい事をさせて頂き、またリーダーも一緒につき合ってもらったことで、かなりストレス発散し、満足した様子でした。
- 他の学校の子ともと友達になれないのでは・・・と心配しましたが、みんなと仲良くなれたようです。
- 他の学校の人と仲良くなれて、自分で何でもしたということです。
- 2年ぶりの参加で、イキイキしていたこと。
- いろいろな出来事を話してくれたこと。
- 帰って来た時に少し成長したかと思った。
- ふだんの生活では体験出来ないことを経験させることが出来て、とても良かったです。
- 帰ってきてからいきいきと生活していた。楽しかったことをたくさん話してくれた。
- 夏休みの思い出の1ページで、集団生活をするという事／普段あまり外遊びをしないので、自然と向き合わせたかった／家族以外との生活を感じさせたかった。
- 夏休みどこにも連れていけなかったのが、いい思い出になりました。
- すごく楽しかったようで、良い思い出ができ、良かったと思います。
- 以前は兄弟喧嘩をすると絶対に自分の非を認めなかったのですが、キャンプ後は叱られる前に謝ったりお兄ちゃんをかばったりと、自分勝手な言動が少し減り、思いやりが持てるようになりました。お蔭様で以前よりも兄弟喧嘩が減りました。
- 集団行動を体験できた事。
- 他の小学校の子たちと仲良くなったようで、良かったです。
- 友達をたくさん作ったこと。
- 楽しかったと帰ってきてくれたのが良かった。
- お友達ができ、楽しんできた事。



**Q8.今回お子様をキャンプに参加させるにあたって、困ったことや
心配だったことは何ですか？**

～◆自由記述回答◆～

- －グループの友だちと3泊4日、仲良くあそべるかどうか。
- －学校の友だち以外の子たちと仲良くできるかどうか。
- －天気が雨だったので、あまり外遊びができなかったのでは、と思いましたが、室内遊びも楽しかったと話していました。
- －元気が良すぎて、他の子ども達にけがをさせないか心配でした。
- －体調が心配でした。
- －ふざけ過ぎて、みなさんに心配かけないか心配でした。
- －初めての参加だったので、グループのみんなに迷惑をかけないか、心配でした。
- －お天気のみ。
- －他の小学校の子ども達とうまくつき合えるか心配でした。
- －前日体調がすぐれなかったなので、その辺が心配だった事と普段チョロチョロしているので、そのあたりが心配でした。
- －普段から言葉が乱暴だったり、悪ふざけをすることが多い子ですので、他の学校の子どもを傷つけたり、スタッフの方々に迷惑をかけてしまうのではないかと心配しておりました。
- －虫に刺されるとすぐに腫れてしまうので、それが心配でした。
- －集団行動が出来るかどうか。



**Q9.今回のキャンプ主催者(東京YWCA)に対して伝えておきたいことは
何ですか？～◆自由記述回答◆～**

- －大学生のお兄さん、お姉さんにたくさん遊んでもらって、家ではできないような経験ができて、帰ってからも楽しい話をいっぱいしてくれました。ありがとうございました。
- －今回初めてキャンプに参加させてもらって、家とはちがう集団生活をして、少したくましくなったような気がします。すごく楽しかったみたいです。ありがとうございました。
- －3泊4日、大変お世話になりました。夏休みだからといって、どこにも連れていけない我が家にとって、「新地っ子」は子ども達にとって楽しい行事です。もっと長いとさらにうれしいです。来年も絶対行かせたいと思います。
- －3泊4日、大変お世話になりました。毎年、子どもは楽しみにしているので、これからも続けてほしいと思います。
- －昨年同様今年も笑顔で帰ってきました。とにかく楽しくて仕方がないようです。毎年続けて行って欲しいです。
- －子どものための行事を長く続けてほしいですネ。
- －また来年もぜひ参加させてほしい。これからもいろいろと企画をしていた



だき、参加させてほしい。

—また来年もぜひやって下さい。できればいいですが、秋のキャンプ

など年2回あると、もっと楽しめるのでは。

—ぜひ来年も再来年も続けて下さい。

—このような楽しいイベントを企画していただき、ありがとうございました。機会があれば、来年もぜひ参加させたいです。

—キャンプ中は大変お世話になり、ありがとうございました。今後も子どもたちが楽しめ、成長できる企画を期待しています。本当にお世話になりました。

—この度はスタッフの皆さまのご尽力により、子ども達に沢山の楽しい思い出を残して下さいまして、ありがとうございました。数日間のキャンプとは言え、そのための準備はとても大変なことと存じますが、町に帰着した時の子ども達の笑顔を見ると、来年以降もこのキャンプをぜひ継続して欲しいと思いました。

—今後も続けてほしいと思います。

—夏休みの良い思い出になり、ありがとうございました。子どもも楽しかったとのことで、来年も参加したいと話していました。ケガなく元気に帰宅出来、ありがとうございました。



青年リーダーの感想

<感想の内容>

- ①キャンプ中の子どもたちの様子について
- ②もっとこうしたらよかったなあと思うこと
- ③キャンプに参加しての感想

入澤勇斗／キャンプネーム はやと（明治大学2年）

① 初日は遠慮がちで緊張している子どもが多いように感じましたが、ずっと一緒にいることですぐに緊張もとれて、のびのびとリラックスできていたと思います。たまに度が過ぎてしまうこともありました。親のいない特別な環境を子どもたちはおもいきり満喫していました。遊んでいる子どもたちの目がきらきらしていて、本気で楽しんでいるのがすごく伝わってきました。

② わたしは子どもに対して受け身になってしまうことが多かったと思います。子どもの話はいっぱい聞いてあげましたが、自分から何かをしようと言ったり、お話をあげたりは全然できなかったです。子どもたちを見ることばかりに目が行ってしまい、他のことがおろそかになってしまった。もっともっと色々な話を自分からしてあげればよかったと思います。また、同じグループのリーダーともしっかり話しておけばよかった。子どもたちがバラバラになるとリーダーも分かれなければならないけど、話す時間はいっぱいあったと思います。

③ 子どもたちと一緒にキャンプするのはとても新鮮でした。私は年下の兄弟がいなくて、子どもたちにどう接するか分からず不安でした。しかし、子どもたちと話してみてもすぐに不安は吹き飛びました。優しく素直な子どもたちで安心しました。お互いの緊張もすぐにとれて、いっぱい遊んで、疲れて、ごはんを食べて、寝る、普段の生活では味わうことのできないとても充実した時間だったと思います。子どもと長い時間を共にすることで、自分自身も小学生の頃に戻ったような気分になりました。キャンプを通して素直であることの大切さを子どもたちから教わりました。「好きなものは好き。嫌いなものは嫌い。」わがままとかではなくてはっきり言いたいことを言うのは大切なことだとよく分かりました。周りの様子を気にしすぎる自分がバカらしく思え、素直な子どもたちが羨ましかったです。このキャンプのおかげで、自分の中でずっとモヤモヤしていたことがすっきりしたように感じました。



上田航／キャンプネーム たこやき（明治大学3年）

① 子どもたちの様子を一言で表すなら「とにかく元気」、これに尽きるだろう。子どもたちの元気よさに圧倒された4日間だった。私は「たこやき」というリーダーネームで今回のキャンプに参加したのだが、それも功を奏し、子どもたちも初日から「たこやきー！！」と話しかけてくれた。結果的に自分のグループだけでなく、他のグループの子とも仲良く遊ぶことができた。みんな常に笑顔で、心からキャンプを楽しんでいる様子が伝わってきたので、私自身満足している。

② 私はグループリーダーとして参加したのだが、グループリーダーの一番の役割は自分のグループを見ることである。しかし、他のグループの子とも仲良くなりすぎたが故に、自分のグループを見ることを疎かにしてしまった部分も出てしまい、反省している。

③ 私は他のリーダーとは違った観点から感想を述べようと思う。それは、このキャンプにおける子どもたちの笑顔の背景にはスタッフ、青年リーダーの陰ながらの努力、頑張りがあったということである。特にグループリーダーとして参加した私は、プログラムリーダーの確かな手腕に驚かされた。集団遊び開始前に導入として「あと出しジャンケン」や「クイズ」をすることで、騒いでいる子どもたちを一瞬にして黙らせ、前を向かせる技量。学年差や体格等で不平等が生じないよう緻密に計算されたゲームバランス。一つ一つのゲームの時間は、子どもたちから「もうちょっとやりたい！」「あと一回やりたい！」との声が飛び交うくらいに配分されていた。子どもたちに満足させるまで遊ばせるよりも、「あと一回やりたい！」との声があがるくらいの時間配分、つまりは子どもたちにとって「足りないくらいが丁度いい」のである。その有り余った体力は、4日間のキャンプが終わった時点で使い切っていればいいのだから。このように、子どもたちを楽しませつつ、4日間ということを考えて、集中力や体力がうまく持続できるようなプログラムが構成されていたことを知ってほしい。

岡本育恵／キャンプネーム いくちゃん（明治大学4年）

① 子どもたちは常に元気いっぱいでした。宿舎の中を1階から2階へ、2階から1階へ何度も往復して、廊下からはいつも誰かの足音がバタバタ聞こえて来ました。夜も就寝時間を過ぎてもお部屋の飾りつけを夢中にしていました。寝不足になることは覚悟していたつもりでしたが、子どもたちの有り余るエネルギーに今年もまた驚かされました。その中で強く感じたのは、子どもたち一人一人に、「その子のペース」があるということ。小学生が3泊4日間の間集団行動をするというのは簡単なことではないと思います。特に私が担当したグループは、最初駒小と福田小でどうしても分かれてしまいがちでしたが、時間が経つにつれてお互いに歩み寄る様子が見られたことがとても嬉しかったです。

② 前回の反省を生かして、今回はリーダー間の情報共有がしっかり出来たと感じています。しかし今回の反省点は、子どもの体力に自分たちがついていくことが出来ず、違うグループの男性リーダーに任せてしまったことでした。原則として、自分のグループの子どもたちはグループのリーダーが責任を持たなければいけなかったのも、もっと早くシニアリーダーやプログラムリーダーに相談をするべきでした。

③ 私は昨年に引き続き2回目の参加だったため、嬉しい再会が多くとても感激しました。昨年会った子どもたちは私のことを覚えてくれていて、「前はこんなことがあったね～」といった話も出来ました。私が「新地っ子の夏休み」に2回参加して感じたことは、「子どもは物凄いスピードで成長する」ということです。再会した子どもの中には、あれ？こんな子だったっけ？とこちらが戸惑うほど変化している子もいました。昨年とはまた違った視点で子どもたちと一緒にキャンプを楽しむことが出来、関わったすべての方に感謝しています。本当に有難うございました。



木内春香／キャンプネーム はるはる （明治大学2年）

① 一緒に生活していくと、子どもたちは皆好きなことややりたいことがそれぞれ違っていることがよくわかりました。緊張も解けていって、子どもたちの個性がどんどん発揮されていくのを見ているのがとても楽しかったです。でもそうすると、誰かがやりたいことをしている間、ほかの子はしばらく我慢をしなければならない状況も生まれてきて、とくに学年が上の子は自分は一歩引いて、ほかの子に譲ったりする場面などが何度かありました。ただ自分のやりたいことをするだけではなくて、全体を見て行動している子もいて、立派だなと思いました。そういう子ももっとのびのびと好きなことができるように私たちがうまくフォローできたらよかったですと思います。

② どこまでが許されてどこからが許されないか、何のどこがいけないのか、子どもたちにしっかりと伝えることができなかつたと思います。せっかくの4日間だから、子どもたちにはなんでもやりたいようにさせてあげたいと思う気持ちが大きく、少しくらいならいいか、となんでも許してしまっていた気がします。叱ったり、注意する勇気を持てなかつたことが反省すべき点のひとつです。そして、より気持ちよく過ごすために、私たちがルールや決まりごとに対してしっかり理由を持って説明できることが必要だと感じました。「なんで？」と聞かれて「決まりだから」「ルールだから」と説明しても子どもたちはなかなか受け入れられない様子でした。子どもたちにとって納得のいくように、わたしたちがもっと考えた上でそれを伝えることができたらよかったですかなと思います。

③ 普段は、こんなに大きな声をだして、たくさんのエネルギーをつかって遊んだり、体を動かしたりすることはほとんどなかつたので、このキャンプに参加して全身が、そして心までほぐれたような気がしました。わたしは子どもと接するのがあまり得意なほうではなかつたので最初はとても不安だったのですが、キャンプが始まるとそんな心配をしていた自分が馬鹿だったなと思うくらい、子どもたちのほうから「あそんで！」とわたしに向かってきました。一緒に遊んだり、ちょっかいを出されたり、じゃれあったり、子どもたちとたくさんかかわることが、気が付いたら本当に楽しくて、自然と笑顔になっていました。準備を入れて5日間、このキャンプのおかげで、いままで知らなかつた自分の新たな一面を見ることができたような気がします。子どもたちにも、お世話になったYWCAの方々と一緒に頑張ったリーダーたちにも、心から感謝しています。あの場所で、みなさんと一緒にキャンプに参加することができて本当に良かったです。ありがとうございました。

坂本祐介／キャンプネーム もっつ

（東京YWCAリーダー・江戸川大学総合福祉専門学校）

① 以前にキャンプの経験がある子どもが多く、緊張している子はあまりいなくなつたと感じます。なぜなら、最初の野外礼拝堂で前に交流のあるリーダーと挨拶を交わしていたからです。キャンプが初めての子も初日で他の



子どもやリーダー達に、慣れていた様子でした。

また、「子ども達にやりたいことを選択させる」というスタイルのキャンプであったため、外で遊びたい子はサッカーをしたり、中で遊びたい子はクラフトやトランプをしたりと本当に楽しんでいる様でした。そして、レクリエーションでは「やりたくない」等の声も聞こえましたが、進行していくうちに夢中になっていたのも、ほっとしました。最後に、キャンプ中無邪気であどけない子ども達でしたが、中には手紙をくれる子がいてその内容は子どもとはとても思えない素晴らしい内容でした。キャンプを通して心身ともに成長したのが見受けられました。

② 私の役割はプログラム係で他のリーダーより子ども達という時間は少なかったが、レク等の行事で子どもたちを楽しませる重要な役割でした。しかし、私の力不足で他のリーダーにサポートしてもらった場面が多かったです。そこで私が感じたのは、ちょっとした時間に子どもたちを楽しませることができるゲームやパフォーマンスを持つべきだということです。なぜなら、子どもたちに説明する際、なかなか聞いてくれない場面が多かったです。子どもたちを引きつけるミニゲームみたいなことをすると、子どもたちはこっちを見てくれます。また、1つのレクにあきた子どもたちを楽しませる手段として、ちょっとしたゲームやパフォーマンスがあると、子どもたちが集中する空間になると思います。プログラムリーダーのなめがこれらを上手にやっていました。

③ 私は子どもたちと関わるキャンプが初めてで、2つの不安がありました。1つ目は、子どもと関わることに対する不安です。自分が子どもたちを楽しませることができるのかというもので、実際キャンプ中では、まず自分が本気で楽しむことで子どもたちも楽しんでくれたので、この不安は消えました。2つ目は、他のリーダー達と関わることに対する不安です。初対面の人と一緒にキャンプをするというのは私にとってなかなか勇気のいるものでした。そして、回りの人たちは自分よりすごい人たちという考えが私を縛り付けていました。しかし、どのリーダーもいい人ばかりで、中でも同じプログラムリーダーの方達にはとてもお世話になりました。最終日は緊張や不安を忘れるほど楽しむことができました。

最後に、私がこのキャンプに参加してよかったと思う出来事の1つに子どもたちからもらった手紙があります。ある女の子からもらった手紙に、礼拝堂でのレク中にわたしがゲームの進行で苦戦している姿がかっこよかったと書かれているものがありました。初めてその手紙を見たときはまさかそんなことが書かれているとは思ってなかったので、驚きと感謝の気持ちでいっぱいになりました。今でもその手紙は私の原動力です。

佐々木龍樹／キャンプネーム りゅうりゅう

(日本ソーシャルワーク協会・武蔵大学4年)

① 多くの子どもたちがこのキャンプを楽しみにしていたようで、とにかく元気な様子でした。なので僕も負けられないよう全力で向き合おうと思い、日々を過ごしました。子どもたちは日々思い思いのプログラムに参加していました。



キャンプに初めて参加する子もいて、初日はリーダーとの接し方に戸惑いを見せていました。しかし、翌日以降はリーダー名で呼んで一緒に楽しんでいる様子を見て、こちらも嬉しく思いました。4日間をパワフルに過ごす子どもたちを見て、僕自身もキャンプに来て良かったと思えました。

② キャンプ中、子どもたちは思い思いに遊んだり、プログラムに参加していました。リーダーとして一緒に楽しみつつ見守ることを心がけていましたが、実際には思うようにはいきませんでした。一度に全員見ることはできないので、プログラムリーダーの助けを借りて何とか対応しました。また、皆でキャンプを楽しむために、他の子に迷惑をかける行為には何度か注意をしました。その結果、敬遠されてしまったようで、リーダーとしての接し方を考えさせられました。

③ 昨年に続き 2 度目の参加となりました。昨年は子どもたちの体力ついていけず、他のリーダーに迷惑をかけてしまいました。そのため今年は全力で向き合うことと笑顔で過ごそうと密かに目標を立てていました。後者はリーダー自身が楽しい雰囲気であれば子どもたちが存分に楽しむことができなと思ったからです。(僕自身の感情表現の乏しさもありますが。)この目標は概ね達成できました。また、今回のキャンプでは女の子が多く参加していて、多くの子とたくさん話すことができ、肩車をすることもありました。思い出としてはグループ全員でハイキングをしたことです。グループ皆でプログラムを体験してほしいだったので、全員で参加できてとても嬉しかったです。今回のキャンプでは僕自身多くのことを経験し学ぶ良い機会となりました。

佐藤ひかり／キャンプネーム **カリカリ** (明治大学 3 年)

① 最初に子どもたちと出会ったときは私のグループの子どもたちは上の学年の 3 人は落ち着いていて、下の学年の 3 人は元気いっぱい、といった印象を受けていました。しかし、4 日間一緒に過ごすうちに学年で一まとまりにしないで、一人一人を見ているとこの子は必ずだれに対してもお礼を言うな、とか元気そうに見えて実は周りの子のこともよく見ているな、と学年に関係なく行動している部分があることに気がきました。

また、変化したことで印象に残っているのは初日に部屋で騒ぎたい派と部屋では静かに休みたい派で分かれた意見がまとまらず、騒ぎたい派が部屋を出て行ってしまうことがあったのですが、3 日目の夜に同じようなことがあったとき、騒ぎたい派の子の一人が司会になってひとりひとりにどうしたいか聞いてどうすれば 1 番良いか決める話し合いを始めたことです。集団生活をする中で、みんなの意見を尊重する大切さに気付いたのかなと思えました。

② 自分のグループ以外の子ども(特に男の子)の名前をあまり積極的に覚えられなかったこと。一度呼ぶ名前を間違えてしまい、傷つけてしまったのではないかととても反省しました。あとは、このキャンプの目的を確か



めていたらよかったかなと思いました。日頃のストレスやわがままをきくことで発散させるのか、集団生活の中で我慢する場面を教えたり、一人ですることを増やすなどの成長することなのか、どちらを目標にすべきか悩むときがありました。自分が今まで子ども側で参加してきた同様のキャンプでは後者だったので、前半は我慢を強いてしまうことが他のリーダーより多かったかもしれません。2日目の夜のリーダー会で、同様の話題になったことであまり我慢をさせてはいけないと気が付きました。

③ 始まる前はすごく不安でした。年の離れた兄弟の末っ子で、親戚の中でも一番年下だったので年下の子とも関わることは人生でほとんどなかったからです。それでも、子どもたちは私をリーダーとして慕ってくれて、リーダーの自覚をさせてくれて本当に助かりました。また、私はあまり活発な子どもではなく家で絵を描いたり寝ていたりするのが好きだったので、子どもたちの中でそういう子がいたときは心からその気持ちを理解して「のんびり過ごしても大丈夫」と言ってあげられたので、自分ののんびりした子ども時代も活発な子からは馬鹿にされたこともあったけれど、無駄ではなかったのかな、と思えるようになりました。また、4日間子どもたちを見続けて、一人一人に個性がある彼ら彼女らがこれからどんどん成長し大人になっていくことを思うと、本当にかけがえのない存在なのだと思います。そうやって大人になって自立していく過程に、子どもたちの人生のほんの一瞬だけだけれど関わることができ、ありがたかったです。



高島尚行／キャンプネーム ごろー（明治大学2年）

① はじめは、大人側の緊張も伝わったのかあまりコミュニケーションをとってくれずこちらの質問を子どもが返す、一問一答式の会話でした。時間の経過と共に次第に打ち解けあい、会話も盛り上がるようになりました。自然豊かなキャンプ場で、たくさん友達と時間を過ごすことにより、驚きや感動をより深く共有できたのではないかと思います。この短い期間で、違う学校の違う学年の子どもたちがこんなにも仲良くなるのか、と子どもの環境の慣れの速さに驚きました。

② 子ども達どう接するべきか？距離感はどう？自分の中には葛藤がありました。自然体でいこうと決めてキャンプに挑みましたが、子どもたちを前にすると悩む場面も多く、それが子どもたちに伝わっていないかが心配でした。長い期間をかけて準備し、今まで何度も子どもたちと接してきましたが、いざ子どもたちと接するとそこには正解がなく難しいなと思いました。今回のキャンプでは、相談できる相手がたくさんいたのもう少し相談すればよかったと反省しています。全体としては、特に大きな反省点はなかったと思います。といいますか自分のグループのことでいっぱい、全体を見る余裕はありませんでした。

③ 子ども達と濃密な時間を過ごせて、とても貴重な経験を積ませていただきました。お子さんを預けてくださった保護者の方々、このような機会を設けてくださったスタッフのみなさんに感謝します。子どもたちを見ていると、

案外大人と変わらないのだなと感じる部分がたくさんありました。また自分と同じところを見つけては、注意できない、、、と尻込みする場面もありました。このキャンプを通じて、子ども達に気付かされる部分が多く、自分を振り返る良いきっかけになりました。一番感謝すべき相手は子どもたちかもしれません。「ありがとう！！ごろーより」

中野亜矢子／キャンプネーム やこ （明治大学 4年）

① 今年は、昨年から続けての参加であったため、昨年出会った子どもと再び時間を過ごすことができた。昨年は緊張がなかなか解れずにいた子ども、早い段階からリーダーと打ち解ける姿や子ども同士の仲間の輪の中で楽しげに遊んでいる姿が見られた。参加した子どもによっては、初回から何度も参加している子もおり、何年にもわたって顔を合わせているうちに小学校の区分を越えて仲良くなっている子たちもいた。子どもとリーダーが過ごしたシャロームハウスが、グループの境なく交流できるいい環境をつくっていた。日中は、自室を飾りつける子や自然豊かなキャンプ場で元気に体を動かす子、シャロームハウスで工作に励む子などそれぞれが自分のペースでのびのびと過ごしていた。今年はキャンプ場の方々へお礼のボードをつくったことをきっかけに、この5日間関わったリーダーたちにお礼の手紙を書く子がたくさん現れたことに驚いたとともに嬉しく思った。

② 初参加のリーダーは子どもへの注意や指示の出し方などで戸惑っている時があり、そこをもう少しサポートできればよかったと反省している。また、キャンプの途中で問題になったことといえば、盛り上がりすぎた「お化け屋敷」である。キャンプを全力で楽しむことはもちろん大事なことが、それで怪我をしてしまったのは元も子もない。遊びが危険な方向にエスカレートする前に、お化け屋敷の中でどの要素が危なく、どのようなやり方なら怪我に繋がらないかをリーダーも一緒に子どもたちと相談していくべきだったと思う。盛り上がった子どもたちを、手に負えないと諦めて傍観するのではなく、このキャンプで自分たちがリーダーとしてどういう役割を持っているのかという自覚をしっかりと持つことが求められている。

③ 今回私は主にプログラムリーダーとして動いていたため、どのグループの子とも関わる機会が多く、昨年よりも全体を見渡すことが出来たように思う。昨年と同じく、純粋に楽しかったという思いが一番だ。昨年参加したので名前を覚えてくれていた子もおり、継続して参加することで少しずつでも確実に育まれる親密さを感じた。中学生の参加もあったことで、子どもたちの中でお兄さん・お姉さんの役割を持って活躍している姿を見られたことも嬉しかった。前回に比べてリーダー同士での意思疎通や交流が持っていたことでリーダーの負担も減らせていたように思う。子どもたちと同じ目線とテンションで楽しむひとりのキャンプ参加者としての立場と、子どもたちの安全と健康を守る大人としてのリーダーの立場を念頭に置いてひとりひとりが活動できれば良いキャンプになるのではないだろうか。今年も楽しい時間をありがとうございました！



野藤夏美／キャンプネーム なっちゃん

(日本子どもソーシャルワーク協会・東京女子大学 4年)

① 子どもたちに初めて会ったときは、緊張しているせいか、話しかけても口数が少なかったり、あまり反応がなく不安に思ったりもしましたが、時間が経つごとに子どもたちはあっという間にどんどんパワフルになっていき、ちょっとしたことがおかしくてひとりが笑うと連鎖してみんなが大声で笑っている場面に出会うと、関係性はこんなにも短期間で作れるものなんだと素直に感動しました。子どもたちが素直な自分、甘えたい自分が出せる環境へと、リーダーやスタッフみんなの力、自然の力、キャンプという場所と時間の力を借りてできたことはとてもよかったです。子どもたちはそれぞれの背景や文脈を持ち、個性豊かでありながらも、初めて会う人たちと触れ合って、4日間一緒に過ごすという体験をしたことで、新たな発見や思い出を持ち帰ってくれたのではないかと思います。

② 受容的な在り方、受容的な接し方の中で、子どもたちがのびのびと過ごし、素直な感情を出せる場所にすることが私の個人的な目標だったのですが、甘えながらも、メリハリをつけることを大事にしなくてはならなかった場面がいくつかあったと思い、そのメリハリがつけきれなかったことが反省点としてあります。

③ 今回このキャンプに参加させていただいて、改めて子どもにとってなにが大切なのか、大人のあるべき振る舞いと子どもとの関係の結び方について考えるきっかけになりました。子どもが世界や他者に対する信頼を失わないよう、大人がしっかりと子どもの存在を受け止めることが大切なのだろうと思います。子どもたちにとって楽しいひと時になってくれたことを願います。



平澤健太郎／キャンプネーム ドンキー

(日本子どもソーシャルワーク協会・武蔵大学 4年)

① 最初自己紹介になった時、初めて参加する子は緊張していて、慣れている子は楽しみが抑えきれない状態が伝わってきて、少し温度差があるかなと感じました。初日の夜の親睦会で、それぞれの自己紹介を含めたゲームをやるとグループ内や全体の壁がなくなった気がしました。子どもたちがキャンプに馴染むスピードは速かったです。

2日目以降は、各々自分のやりたいことをやれるようになってきました。Yes、Noを言えるようになったことが、自分の気持ちを表現できている証拠です。様々な形で子ども同士やリーダーに対して表していたと思います。最終的には満足した顔を浮かべる子どもが多かったと感じました。

② 1つ目は食事の時です。食事の際、プログラムリーダーは適当にグループに混じって食事をします。今回は、全部のグループに入れず、食事の準備は全部のグループの様子を見られましたが、食事の様子は掴めなかったので変化に気付く機会を失ってしまったのが残念です。



2つ目はプログラム以外の遊びに関わる機会が少なかったことです。プログラムの準備があったため、子どもが部屋でトランプ等しているのに一緒に遊べなかったです。もっとゆとりを持って動ければ、そのような輪に入れたと思います。一緒にトランプしたいと言っていた子がいただけに残念です。

③ ②で感じた部分もありますが、私自身やり遂げたと思っています。今回、私は体を動かして遊ぶ専門だったので、子どもと一緒に遊び、求めているものに答えることを目標にしました。自分が持っているパワーを最大限発揮して子どもと遊びました。子どもにとっても満足したのではないかと思います。

子どもたちに対しては、キャンプでは許されていたことが、日常生活においてそうでない部分が出てくると思います。そのギャップを臨機応変に対応していてもらいたいと思います。ただし、私に腹パンチをした件ですが、一般的な人には耐えられないので友達等に対してそのような行為はやめましょう。

楽しかった時間を多くの人と共有できて良かったです。ありがとうございました。

星弓子／キャンプネーム だるちゃん（明治大学3年）

① 新地っ子の夏休みが子どもたちにとって楽しい思い出となっているといいなと思います。私にとってはこの3泊4日はとても楽しいものでした。新地っ子たちは個性豊かででのびのびとしているので、一緒に過ごしている時は私も夢中になって遊びに混ざっていました。

② 私とみやおでグループリーダーを務めました sun flower(B グループ)はみんなをまとめてくれる子、たくさんおしゃべりしてくれる子、元気が有り余っている子、リーダーの言うことをよく聞いてくれる子、最初は大人しい子かと思ったらトランプで凄い盛り上げてくれた子、同じ小学校はいなかったけれど、グループメンバーで仲良くなれた子がそれぞれ楽しい時間を過ごしたのではないのでしょうか。私とみやおはとても楽しかったです！

終わった後にですが、ひとりひとりとより丁寧に向き合うことができればよかったと考えます。グループ内でやりたいことが異なる時など、どうすればよかったのでしょうか。毎日一緒に過ごす家族とはまた違った接し方があるのかなと、他人同士の3泊4日という短い日数なりの向き合い方があるのだと思います。

③ 東京に帰ってきてから、新地っ子の夏休みを振り返ると、とても充実した時間であったと思えます。どうしてだろうと考えると、今までにない経験をできたからだと思います。子どもたちとキャンプをするということは私にとっては初めてのことでした。今回のキャンプに行くに当たり、事前にリーダーたちで準備を重ねました。子どもとの接し方の話を聞き、単にキャンプに行くだけでなく、子どもたちの心の拠り所となるようなキャンプとなる必要を知りました。子どもとの接し方を難しく考えたりもしましたが、キャンプ本番を楽しめたので良かったです。



水野聡子／キャンプネーム さっちゃん

(日本子どもソーシャルワーク協会)

① 子どもたち同士は、あっという間に馴染んでいました。私のグループでは、自分の話をどんどんする子が多く、好きなこと、学校や家族のこと、将来の夢、いろんな話をしました。親の仕事が震災で打撃を受けた話をする子もいて、その子にとって、震災の記憶が今だに強くあるのだと感じさせられました。キャンプ最初の頃は「これやっていい?」「次は何?」とリーダーによく聞いてきた子どもたちが、日が経つにつれ「○○やりたい!」「今日のお風呂は○○時だね?」など、自分たちで行動を起こすようになりました。水遊びではしゃいだり、部屋の飾り付けに夢中になったり、他の部屋を回ったり、子どもたちそれぞれに好きな過ごし方がありました。

少し気になったのは、複数の子たちで他のリーダーに否定的な態度や言葉をぶつけて遊ぶ、攻撃するような場面が度々あったことです。そうすることで気持ちを発散しつつ、受け入れてもらえる楽しさを楽しんでいるように感じられました。思いっきり気持ちや行動を出せるキャンプにと思いつつも、人を傷つけて遊ぶことは違ふよと伝える必要も感じ、私自身、声かけのタイミングに迷うこともありました。

② 「みんなで一緒にやる」ような状況を無理強いせず、1人1人の気持ちにもっと注意を払う必要があったなあと思いました。部屋で怪談話が始まった際、怖いのが苦手と泣き出しそうになった子がいました。ハイキングの際には、行こうよ〜と私から誘ったこともあって、渋々参加した子が「戻りたい」と途中で訴えてきたこともありました。それぞれの子がどんな気持ちかな?と常に考えつつ、自分の考えや判断を押し付けてしまっていないか自覚的でありつつ、その時々を過ごせたらよかったなと感じました。

③ 子どもの目を通して見える世界を忘れずにいたいなあとしみじみ感じたキャンプでした。純粹に何かを楽しんだり、感じたり、行動することは、自分らしくあるために基本のことで、子どもにも大人にも大切な時間・環境なのだ、子どもたちとの関わりを通じて気づかされました。



宮尾依李／キャンプネーム みゃお (明治大学3年)

① キャンプ場についた時点で子どもたちは、すでに元気でまったく人見知りをしない姿に驚かされた。私の担当したグループの子どもたちは、最初はあまり受け入れられていない感じで言うことを聞いてくれないこともあったが、数日間一緒に過ごし仲良くなり言い方にも工夫を凝らすことで、前より言うことを聞いてもらえるようになった。食事は、それぞれ好き嫌いはあったもののよく食べていたと思う。中でも、肉が嫌いな子が牛丼を口にしてみても、おいしいおいしいと食べていたのが印象に残っている。遊びに関しては、おののの好きなことに取り組んでいて、新しい遊びには興味津々な様子だった。特にトランプはみんなで遊ぶことができよくやっていた。

② 改善点としては、ひとつに子どもたちと一緒に過ごしている間、時々疲

れてしまったり眠気に襲われることがあり、そのときは子どもたちと全力で遊ぶことができずつまらない思いをさせてしまったかもしれないこと。人間だから疲れるときや眠気に襲われるときもあるがその際、自分も無理せず、子どもたちと楽しく遊べればいいのになと思った。それから遊びの途中、ついつい童心に戻ってしまってリーダーという立場を忘れかけてしまったことがあった。子どもたちと一緒に楽しむことは大切だが安全面からしても常にリーダーという立場を忘れてはいけないと思った。

③ 今回のキャンプは部活動の一環として何気なく参加したキャンプだったが普段の部活動のキャンプとは一味違い、参加して本当によかったと思う。普段、子どもに関わる機会が全くといっていい程なくキャンプまでの間、子どもたちにどう接していいのかわからなく不安もあった。しかし、子どもたちや経験豊富なリーダーの方々と過ごしてどうすれば良いか、なんとなく分かってくるまで、子どもたちと楽しく過ごす貴重な体験ができてよかった。

また、キャンドル作りや水鉄砲、折り紙などもうやらなくなってしまった遊びを久しぶりにやれたことも、日々の忙しさから開放された感じがして癒しとなった。

このキャンプを終えた後に、部活の方でも子どもたちとキャンプをする機会があったため、とても参考になった。



八木明香／キャンプネーム さーや（明治大学3年）

① 私のグループだけでも変化の様子は1人1人全く異なっていた。気付いていないこともあるだろうが、初めての環境、知らない人ばかりの中で、順応していく姿がみられた。会ってすぐは、とにかくたくさん話す子だったのに、段々落ち着いてきた。初めは話しかけてもぼそぼそと答えて、はにかむ程度だったのに、半日で堂々と話せるようになり、次の日には言葉が柔らかくなった。リーダーに気を遣うことが多かったが、甘えてくるようになった。初対面の人と話すことを恥ずかしがっていたのに、半日でリーダー全員と遊んでもらった。初めはなにもやりたがらなかったのに、配膳や片付け、掃除などを進んでやるようになったなど。

② 反省点としては、自分に余裕がなかったこと。これに尽きる。目の前のことに一生懸命になりすぎて、広い視野を持てなかった。グループとしてなにか同じことをする機会があってもよかったと思う。また、遊びが分かれてしまうことが多く、同じグループのリーダーと、一緒にいることはほぼなかった。それぞれが2、3人の子どもたちを見ていたため、担当してない子どもたちの1日の生活について連絡し合う時間が上手に取れなかった。意見交換をしたかった。他のグループのリーダーに任せきりになってしまうこともあった。

③ 1番感じたことは、誰ひとり同じじゃなくて、思うことは全く違う。そのそれぞれがすばらしく、大切に、そのままでもいいものなのだという。大人になるにつれ、その上にたくさんの覆いがかかり、本当の自分は何者なのか見えなくなってしまうこともある。子どもたちのもつ、純粹さ、真っ白なこ



ろに触れて自分の原点に戻れた気がした。その他にも、たくさんの気づきがあり、思い出深いキャンプとなった。この機会を提供して下さった、すべての方々に感謝したい。お別れのときには、恥ずかしながら、泣いてしまった。5日間で私をこんな気持ちにさせてくれた子どもたちに、「ありがとう」を言いたい。

山川貴澄／キャンプネーム たか（明治大学4年）

① キャンプの最初、子どもたちはリーダーたちの様子をうかがっているようで、控えめで丁寧な言葉を使うことが多いように感じた。それでも自然あふれる環境下で存分に走り、楽しみたいという気持ちが伝わってきた。遅くとも2日目の夕方頃には、子どもたちは他グループのリーダーの名前も覚え始めていて、リーダーと子どもたちの距離感はどんどん近づいてきていると実感した。子どもは、気を許した大人にはとことん甘えががるものだと思ったし、また甘え方もそれぞれの個性があって、それを理解して受け止めることが非常に大事だと強く感じた。

② 私はプログラムリーダーであったためグループリーダーとは別の視点から子どもたちを見ることができたが、故に全体をマクロ的にみることに意識が強くなり、子どもたちのそれぞれの性格を見る余裕がなかったことが反省点として挙げられる。なぜなら、一人ひとりの性格や個性を受け止めない信頼関係は深く築けないからだ。また、子どもたちは自分が傷ついていたとしてもそれを全面に出すことに抵抗があり、注意深く表情などを捉えないと子どもの気持ちを汲み取ることが出来ないと思った。

③ 最後に全体を通しての感想を述べる。震災の影響は様々な形で表れるが、家族を失うことや、普段思うように遊び回れないこともあるだろう子どもたちの気持ちを真剣に理解することは容易なことではない。だからこそ慎重になることも必要だし、時には自分も子どもに戻ったかのように子どもたちとはしゃぎ回ることによって楽しみを共有できる。今年で四回目となる新地っ子の夏休みは、新地の子どもたちにとって一つの居場所となっていることは間違いないだろう。初参加で、且つグループリーダーでもなかった私に沢山甘えてくれた子どもたちにとっても感謝したいし、同時に継続して活動を行っていくことが求められていることを思った。



チーフリーダーの感想

吉田夏子／キャンプネーム なめ

(東京 YWCA キャンプリーダー／お茶の水女子大学4年)

子どもたちとは、今年も元気に出会うことができました。今年特に気になったことと言えば、学校でも先輩・後輩関係が明確になっていたり、学校も同じ中学生たちの学校や普段の生活での関係性を継続してしまう部分であった。願わくば、キャンプでしか出せない自分や、居場所としての空間になりたかったものの、そうなりきれなかった子もいたのではないかな、と気になっている。

今年リーダートレーニングを比較的充実してやることができたこと、事前リーダー同士のコミュニケーションがとれたことは、昨年の反省も活かすことができた点でとても意義があった。欲を言えば、心構えや考え方などの内容だけでなく、より具体的なゲームのリードの仕方や声のかけ方、プログラム・グループのリーダーそれぞれに注意事項などのトレーニングをしてもよかった(YWCAで実施しているトレーニングでも)。グループに2人のリーダーがいることによるメリット・デメリット共に今年も考えさせられた。また、下見の段階で、冷房に関しての注意まで気がつくことができなかった。食事に関しては机の配置や諸々のタイミングなどもうすこしうまくできたのではないかな。

子どもたちから、「こういうことがしたい」という意見が少なかったように思う。それは、宿泊棟のロビーに創作意欲を刺激するような配置がうまくいったとも言えるだろう。

私自身は、自由度を高めたいと思うあまりすこし臆病になってしまった。特にハイキングは、全員参加のイベントにしたかったが、わくわくタイムの一環のように自由参加的になってしまったのは悔やまれる。最終日、意外な子からも別れる間際に手紙をもらったのはとても意外で、非常に感動した。このキャンプは、お互いを認め合う、尊敬しあうということができる空間だ。今回参加した子どもたちが、ふとしたときに思いだして、笑顔になってくれたら、自信になってくれたら、とても嬉しい。少なくとも私にとってこのキャンプはそういった存在だ。

是常景子／キャンプネーム おケイ

(東京 YWCA 青少年育成事業部 職員)

新地町子どもたちと過ごすのは今年で2年目となります。

例年になく、新たな子どもたちが多く参加し、新たな出会いがたくさん生まれたキャンプでした。子どもたちが自然に「やってみよう」「話を聞こう」「参加してみよう」と思える環境づくりを心掛けました。例えば、みんなが持ってきたたくさんのおやつ。「みんなで食べましょう！」と書いて貼ったら、1人の子がみんなに分けはじめたり、「キャンプ場の人にありがとうの手紙を書くよ！」と言ったら、何人かが他のリーダーたちへも手紙を書き始めるなど、微笑ましい光景がたくさんありました。そんな仕掛けづくりを大切に過ごしました。

また今年も、過去の「新地っ子の夏休み」に参加経験のある子どもたち5名が中学生として参加しました。このキャンプも4年目を迎え、経験を重ね、お兄さん、お姉さんになった中学生にキャンプをリードしてもらおうと、準備を進めていました。さすが中学生！やることや提案は、小学生よりもダイナミックになり、



自分より小さな子たちを手助けする姿もありました。その中で、中学生ののんびりできる場や、おしゃべりの場、普段の中学生活ではあまり関わっていないが、こうして一緒にキャンプに来て過ごすことでの発見やつながる機会を意識していけると、中学生たちに寄り添う時間も持てたかなと思いました。

寺出さんの研修を経て、準備では「1人ひとりに寄り添い、受けとめていくこと」、リーダー・スタッフとのチームづくりの2つを意識しながら準備を進めました。その中で、今年のリーダーたちは、準備会、キャンプへの関わり方が昨年にも増して積極的であることが印象的でした。昨年の青年リーダーが再び参加してくれたことも、うれしい喜びと共に、大きな助けとなりました。リーダーたちの子どもたちへの丁寧な対応と、スタッフたちの暖かな支え、そしてキャンプを受け入れてくださった森郷キャンプ場のみなさん、応援に来てくださった三菱商事のまるはさんにも感謝を伝えたいと思います。

日常生活や緊張からの解放が、少しでも子どもたちがこれから生きていくための力となり、またキャンプでの出会いと体験が、子どもたちの元気となるように願っています。

カメラマンより～感動ということ～

白井祐介／キャンプネーム しらいちゃん (カメラマン)

「新地っ子の夏休み」キャンプに参加した。今年も声をかけて頂き、4回目。あれから3年経った。長い時間は、恐ろしいくらい早い。正直、参加にあたって、何をしに行くのかという事を、あまり考えなかった。結局、悩んだり迷ったり難しい事を考えた挙句、僕のする事は、写真を撮りに行く事だった。

3泊4日間ひたすらに、子どもたちは自然の中で遊び回った。夢中で玉入れやシッポとりをし、リーダーに思いっきり攻撃をする。べったり甘え、感情むき出しに喧嘩をする。ゆっくりゆっくりご飯を食べ、遠めから控えめに水鉄砲を放つ。

色々な人や様々な物事の中から、つい共通点を見つけようとする事があるけれど、同じ場所でもともに過ごす子どもたちを見ていると、それは逆である事に気付く。すこしはみ出しているところ。隙間を埋められる感覚。楽しいや面白い、悲しい寂しいという訳でもない、不思議な感情が動かされる。多分、ギューツとか、スーとか、ストンとか、そんな事なんだと思う。

最後の夜、みんなが輪になった。印象的だった、アブラハムには7人の子。そして、リーダーからのお礼の歌。いろいろでばらばらな大きい輪が、胸を打つ。今年もまた、泣きたくなくなってしまった。確かそれは、ザワザワとか、ジワーだったかもしれない。

感動ということについて少し知る事ができ、与えられた。子どもと向き合ったリーダーたち、リーダーと一緒に遊んだ子どもたちは、もっとそれ以上だろう。結局、僕は、何かをしに行くつもりだったはずなのに、写真しか撮っていない。大事な事を学んだと、写真を見返しながら思っている。

最後に、今回のキャンプに携わられた皆様へ。
本当にどうもありがとうございました。



新地町の子どもたち 4年目の関わりを経て ～「集団と個」について～

寺出壽美子／キャンフネーム すみこさん

(NPO 法人 日本子どもソーシャルワーク協会理事長/
東邦大学薬学部講師/東京 YWCA 青少年育成事業部会委員)

「新地っ子」の夏キャンプは、2011 年から毎年、野尻湖、山中湖、仙台秋保温泉、仙台森郷とキャンプ地を移動しながら 4 回を重ねて来ました。4 回全て参加したのは、外山さん、白井さん、男子 1 人と私の 4 人です。こうして紙面に向かうとさまざまな出来事や思いが交錯して、4 年間関り続けて来たことの不思議と、感慨を新たにしています。

毎年、毎年、その場でぶつけられた諸問題や課題に、生身の子ども相手に奮闘してくださったその年々のリーダーの皆様へ深い感謝の気持ちで一杯です。

今年のリーダーの皆様のご感想を読んで、一年一年積み残してきた課題を新たな一年一年でクリアしてきたのだという実感を持ちました。ということは、いかに主催者自体の力量が問われてきたかということでもあります。4 年間、外山さんはひたすら猪の如く走り続けて下さり、何と言ってもこのキャンプの立役者です。白井さんは毎年、子どもたちの躍動の姿をカメラにおさめて下さいました。そして、昨年、今年と若い世代が台頭して、新たな活力と工夫が生まれて来ました。今夏は、リーダーの数にも恵まれ、グループリーダーとプログラムリーダーの両方を配置することができました。さらに、昨年に引き続き 2 年続けて参加して下さいましたリーダーが 4 名もいらしたことが、今年のキャンプをスムーズに進行できた要因だと思っています。今年のリーダーのご感想を読んで特に嬉しかったことは、リーダーの多くの皆様が、子どもから学ぶことができた、子どもから気づかされたことと記していることです。リーダーお一人おひとりの豊かな人間性に触れた思いです。

私自身の振り返りとしては、みんなに伝えなかったことは何で、伝えようとしたけれど伝えられなかったことは何で…と毎年数え上げながら自らの至らなさ、未熟さに歯がみした、4 年間でもありました。現場に居させてもらえることへの感謝と、その中で、子どもに関わる関り方を考え続けていくことが自らに課されたことであります。いつものことながら、考えることに終わりはないと感じています。

リーダーの皆様の中で、今後も子どもの現場で関り続ける方々には、「集団と個」については是非考え続けていただけたらと思っています。これは一年目のキャンプ時から突きつけられている課題であり、お一人おひとりが今後も考えていってほしい問題だからです。学校で、キャンプ場で、その他至る所で、いとも簡単に「全員参加」が求められています。「全員参加」を当然として求める背景は何でしょう…。学校では、運動会や遠足、文化祭、修学旅行とさまざまな行事があります。子どもはどの行事にも全て参加しなければならないのでしょうか。

翻って、キャンプ場でのハイキングに全員参加を求めることは大切なことでしょうか。例えば、30 人の子どもが一人ひとりハイキングに行きたいと希望した時には必然的に全員参加となるでしょう。それでは、ハイキングに行きたくない子どもがいる時に、大人が全員参加を求めることはどうでしょう…。日本では、少なくとも明治以降、個の希望(意思)は抑制されて、集団として全員が同一行動に従うという思想(軍隊の行動規範が学校内に浸透)が、学校だけでなく社会の隅々にまで浸透しています。

ハイキングに全員を行かせたいという大人の思いは何でしょう…。目的地に到達できた達成感や自信の醸成、目的地までの自然との遭遇の驚きと喜び、皆と協力して成し得た一体感や爽快感等々…いくつでもあげることができるでしょう。全ての子どもに同じような喜びや体験を味わわせてあげたいという大人の善意が全員参



加を求めるのかもしれませんが。けれどもハイキングに行かなかった子どもは何も体験できなかったのでしょうか。ハイキングに行かなかった子どもは、逆に行かなかったことで豊かな体験を重ねているかもしれないのです。例えば、残ったリーダーと2人きりで受けとめられたことが、一生忘れ得ない思い出になっているかもしれません。心根を傾けた作品の創造に充実感、達成感を味わっていたかもしれません。キャンプ場での多くの友だちとの関りから、ほんの束の間、ひとりになる時間をもちたいと思っていたかもしれません。

ハイキングに全員参加することが、豊かに生きることの唯一の道でしょうか。一人ひとりの子どもの気持ちを尊重し、豊かに生きていってもらうために大切なことは何なのかを、もう一度お一人おひとりが深く掘り下げて考えていただけたらと願っています。何故なら、自閉症スペクトラムの子どもたちやそこに地続きの子ども達は、フツと言われる人々(いわゆる健常者)の無理解の中で、特に集団の場面において、人知れず苦しんでいることが如何に多いかということを、日頃、私は数多く目撃しているからです。フツと言われる人々だけで社会は構成されているわけではありませんし、フツと言われる人々の規範に、他の人々を一律に押し込めることが如何に彼らを尊重していないことであるかに、もう少し敏感でありたいと思っています。

児童精神科医の高岡健さんは、各国のお辞儀の風習やテーブルマナー等は個体の「発達」とは無関係であるにも関わらず、それらは「社会性の発達」の中に含まれることにより、「ほんらい自由に振る舞えば良いはずのものをわざわざ不自由に振る舞うこと」が「社会性の発達」という理解でくられることになったと、『自閉症スペクトラム“ありのまま”の生活』*1(明石書店)で述べています。又、自立とは相互に依存するものであり、生活も相互に依存するものであって、それこそが平等であるのであって、いわゆる健常者の発達を「正常」とみなし、多様性発達を「異常」とみなしてきたこれまでの知の変更*2 が求められていると主張しています。

このキャンプは地震・津波・原発事故を背景として開始された事業です。新地町という地域・家族の中で生活している子どもたちが津波や原発事故の影響をまろに受けて、その中で格闘してきた様子を聴かせてもらうにつけて、逆に私は多くのことを学ばせてもらったと思っています。

この4年間の夏キャンプには、多様性に富んだたくさん子どもたちが何回も参加してくれました。個性豊かなさまざまな子どもたちが繰り返し参加してくれたことが、このキャンプの最大の意義だったのではないのでしょうか。

最後に、毎年、多方面の個人や団体の皆様に惜しみないご協力を賜り、心より感謝申し上げます、御礼のことばとさせていただきます。



*1 この本の中で、自閉症スペクトラムの小道モコさんは、『「孤独」を感じるということは、例えるなら、大輪のひまわりが、自分がたった一粒の「種」だった頃を思い出すような、強い意思の源を辿る行程なのだと思う。…ヒトは「孤独」の中に自分を見つけ、自分の中に他者を育てていくのではないだろうか。』と述べています。

*2 フェントン(Fenton A)の論文より。



スタッフ紹介

【責任者】

外山 真理(公益財団法人東京YWCA 青少年育成事業部 統括責任者)

寺出 壽美子(NPO 法人 日本子どもソーシャルワーク協会 理事長/
東邦大学薬学部講師/東京YWCA青少年育成事業部会委員)

【チーフリーダー】

是常 景子(公益財団法人東京YWCA 青少年育成事業部 職員)

吉田 夏子(公益財団法人東京YWCA キャンプリーダー/
お茶の水女子大学4年)

【プログラムリーダー】

坂本 祐介(東京YWCA 子ども会リーダー/江戸川大学総合福祉専門学校)

中野 亜矢子(明治大学4年)

平澤 健太郎(NPO 法人 日本子どもソーシャルワーク協会/武蔵大学4年)

山川 貴澄(明治大学4年)

【グループリーダー】 ☆はプログラムリーダー兼務

A グループ

八木 明香(明治大学3年)

岡本 育恵(明治大学4年)

B グループ

水野 聡子(NPO 法人日本子どもソーシャルワーク協会)

佐藤 ひかり(明治大学3年)

C グループ

野籐 夏美(NPO 法人 日本子どもソーシャルワーク協会/東京女子大4年)

木内 春花(明治大学3年)

中野 亜矢子☆

D グループ

星 弓子(明治大学3年)

宮尾 依李(明治大学3年)

E グループ

上田 航(明治大学3年)

高島 尚行(明治大学3年)

山川 貴澄☆

F グループ

佐々木 龍樹(NPO 法人 日本子どもソーシャルワーク協会/武蔵大学4年)

入澤 勇斗(明治大学2年)

坂本 祐介☆

【カメラマン】

白井 祐介



ご協力くださった方々、協力企業・団体のご紹介

～感謝を込めて～

- 新地町教育委員会
- 新地町立駒ヶ嶺小学校、新地小学校、福田小学校
- NPO 法人 日本子どもソーシャルワーク協会
- 明治大学震災復興支援センター
- 三菱商事株式会社
- 三菱リアルエステートサービス株式会社
- 雪んこまつり実行委員会
- 個人としてご寄付をくださった皆さま



資料

案内チラシ



公益財団法人東京YWCA

新地っ子の夏休み2014



緑豊かな利府町の森郷キャンプ場に行くよ！
星を見たり、思いっきり楽しい夏休みを過ごしましょう！
久しぶりの子ども初めての子ども、みんなで会えるのを
楽しみにしているよ！

期間 ● 8月7日(木)～10日(日) 3泊4日

場所 ● 森郷キャンプ場(宮城県宮城郡利府町森郷字惣の関北 56-2)

対象 ● 福島県新地町の小学3～6年生 30名、中学生5名(定員を超えた場合は抽選となります)
参加費 ● 5,000円(食費の一部として)
申込み ● 裏面の参加申込書に記入の上、7月4日(金)までに在籍している小学校にご提出ください。
▼参加されるお子さまには、詳細なご案内をお送りします▼
【往復に使う交通機関】貸切バス 所要時間約1時間半

参加者対象の説明会

内容、キャンプ場、スタッフ体制、安全管理、持ち物などについてご説明します。
日時：7月18日(金) 18:30～19:30
場所：新地町農村環境改善センター大集會室

後援：新地町教育委員会
協力：NPO法人日本子どもソーシャルワーク協会、明治大学震災復興支援センター
▲三菱商事の資金的援助により実施いたします。

主催 公益財団法人東京YWCA青少年育成事業部教育キャンプ課
101-0062 東京都千代田区神田錦町台 1-8-11 Tel.03-3293-5466 Fax.03-3293-5570
Email:beta@tokyoywca.or.jp ホームページ http://www.tokyoywca.or.jp/

東京YWCA 新地っ子の夏休み2014 参加申込書

記入日 月 日

ふりがな	性別	男		女	
名前	生年月日	西暦	年	月	日
在学名	学年		年		
保護者名	続柄				
連絡先	〒				
電話	ファックス				
一緒に申込み兄弟姉妹					
「新地っ子の夏休み」に参加したことがありますか？		初参加	2013参加	2012参加	2011参加

切り取り線

新地町のみなさまへ

「新地っ子の夏休み」は今年で4回目を迎えます。毎年、新地町の3小学校から約30人の子どもたちが参加し、青年リーダーたちと一緒に生活を共にしながら、楽しく過ごしてきました。

今年は、仙台の森郷キャンプ場にて、青年リーダーたちと一緒にのんびり、楽しく、過ごします。1人ひとりのひのび過ごせるように、リーダーが子どもたち1人ひとりと向き合い、4日間を過ごしていただきます。

みんなで一緒にお風呂に入ったりご飯を作ったりと生活をしながら、ボール遊びや水遊び、レクリエーション、ハイキングなど子どもたちの「こんなことしたい!」「こんな風に過ごしたい!」の声を聞きながら、みんなで作り、過ごすキャンプです。初めて参加する子ども、継続参加も大歓迎です。スタッフ、リーダー一同、子ども達に会えるのとても楽しみにしています!

保護者の感想より

「楽しかったよ!」と帰ってきたので、キャンプに参加させて良かったと思いました。帰ってきた日は、キャンプ中の話をずっとしていました。家族と離れて泊まりに行く事がなかったので、全て自分でできる心配でしたが、昔のキャンプを思う分楽しんでくれた様だったので、親としても参加させて本当に良かったと思いました。 2013年参加

帰ってきた時に話がとまらないくらいキャンプの思い出を話してくれました。

2013年参加

集団生活の大切さを知ることで、自然の中でテレビやパソコン、ゲームなど離れることがとても良かったです。とても楽しくなって帰ってきた感じがしました。 2013年参加

*YWCAについて
YWCA (Young Women's Christian Association) は、1855年英国で始まった国際 NGO、今では日本を含む125か国以上の国と地域で、約250万人の女性たちが活動しています。
東京 YWCA は、日本にある「地域 YWCA」のひとつです。キリスト教信託に立ち、青少年と女性のフォークラス、人権・健康・環境が守られる平和な世界を実現することを目的に、世界の仲間と共に活動しています。



公益財団法人東京YWCA

101-0062 東京都千代田区神田駿河台1-8-11

Tel.03-3293-5421(代表)

Fax.03-3293-5570

HP : <http://www.tokyo.ywca.or.jp/>

YWCA は

Young Women's Christian Association の略で、キリスト教を基盤に、人権や健康や環境が守られる平和な世界を実現することを目指して活動する国際 NGO です。1855 年英国で始まり、今では日本を含む 125 あまりの国と地域で、約 2500 万人の女性たちが活動しています。

東京 YWCA は、1905 年に創立されました。女性団体、ボランティア団体、青少年団体としての長い歴史をもつ、日本の NGO の草分けです。

東京 YWCA のキャンプは、子どもたちの豊かな成長を願い、長野県野尻湖畔に所有しているキャンプ場で、夏を中心に青少年・ファミリーを対象に教育キャンプを実施しています。東京 YWCA 総幹事であったエマ・カフマン女史(カナダ)により広大なキャンプ場が長野県野尻湖畔に開かれたのは、82 年前のことです。自由で民主的なキャンプが当時から行われてきました。ひとりひとりに与えられている可能性を引き出し育む「のじりキャンプ」の精神・技術を基本に「新地っ子の夏休み」を実施しています。